

繪本三國妖婦傳

中編
四

13
2892
9



13
2892
9

繪本三國妖婦傳中編卷之四

目錄

吉備大臣歸朝 妖狐謀て日本へ渡

遣唐使廣成吉備公玄昉歸朝の喉を切

若菜女言偽公の船を焚日本へ渡る圖

遣唐使歸朝糸内之圖

昭和
七年
三月
九日
終末

坂部行綱嬰女以拾養 藻女和歌献て官女ハシ

行綱清水下向の圖

行綱夫婦七夜以祝さる圖

清凉殿に於て藻女和歌献る圖

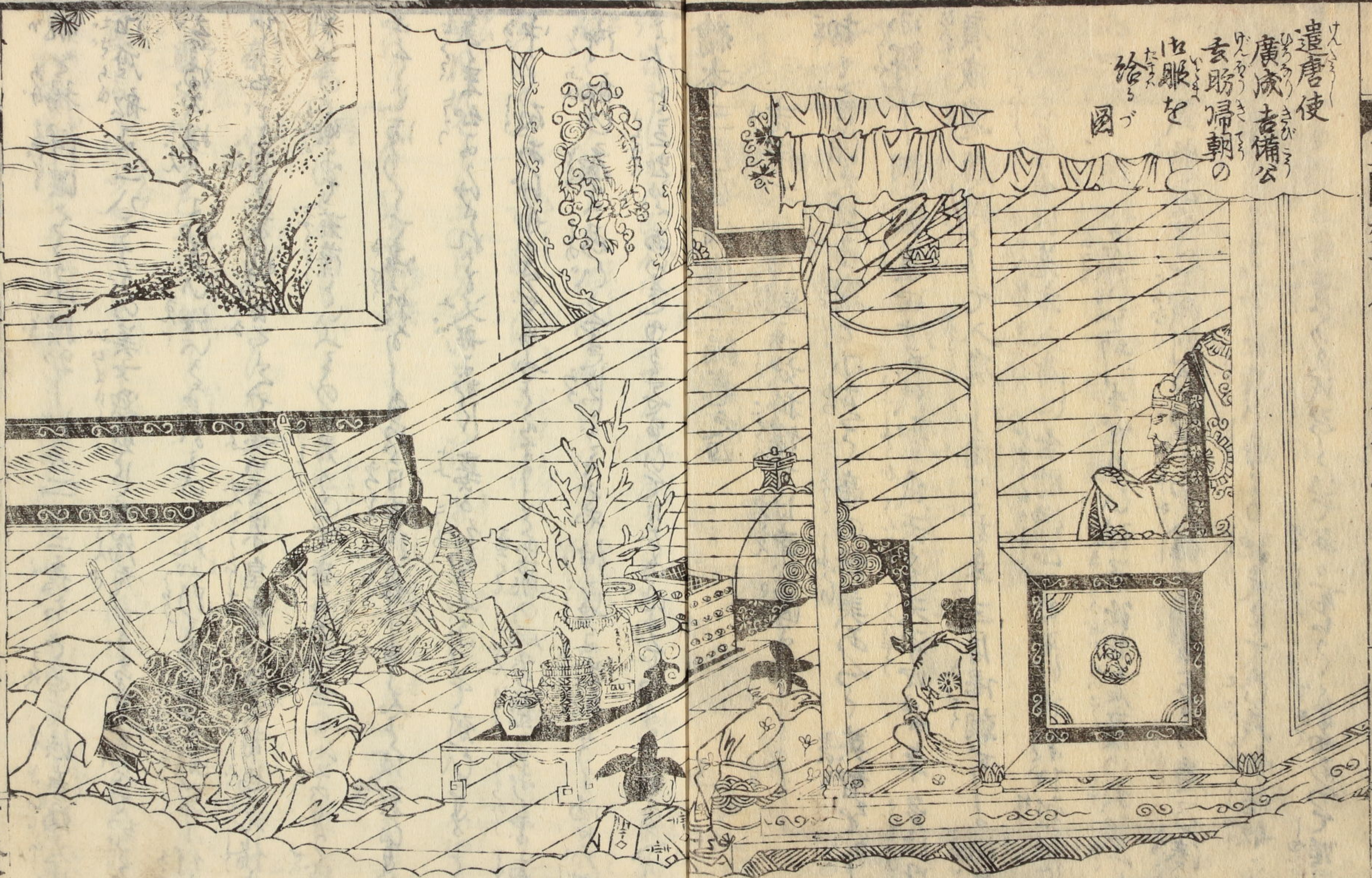
行綱勅免以養ふ圖

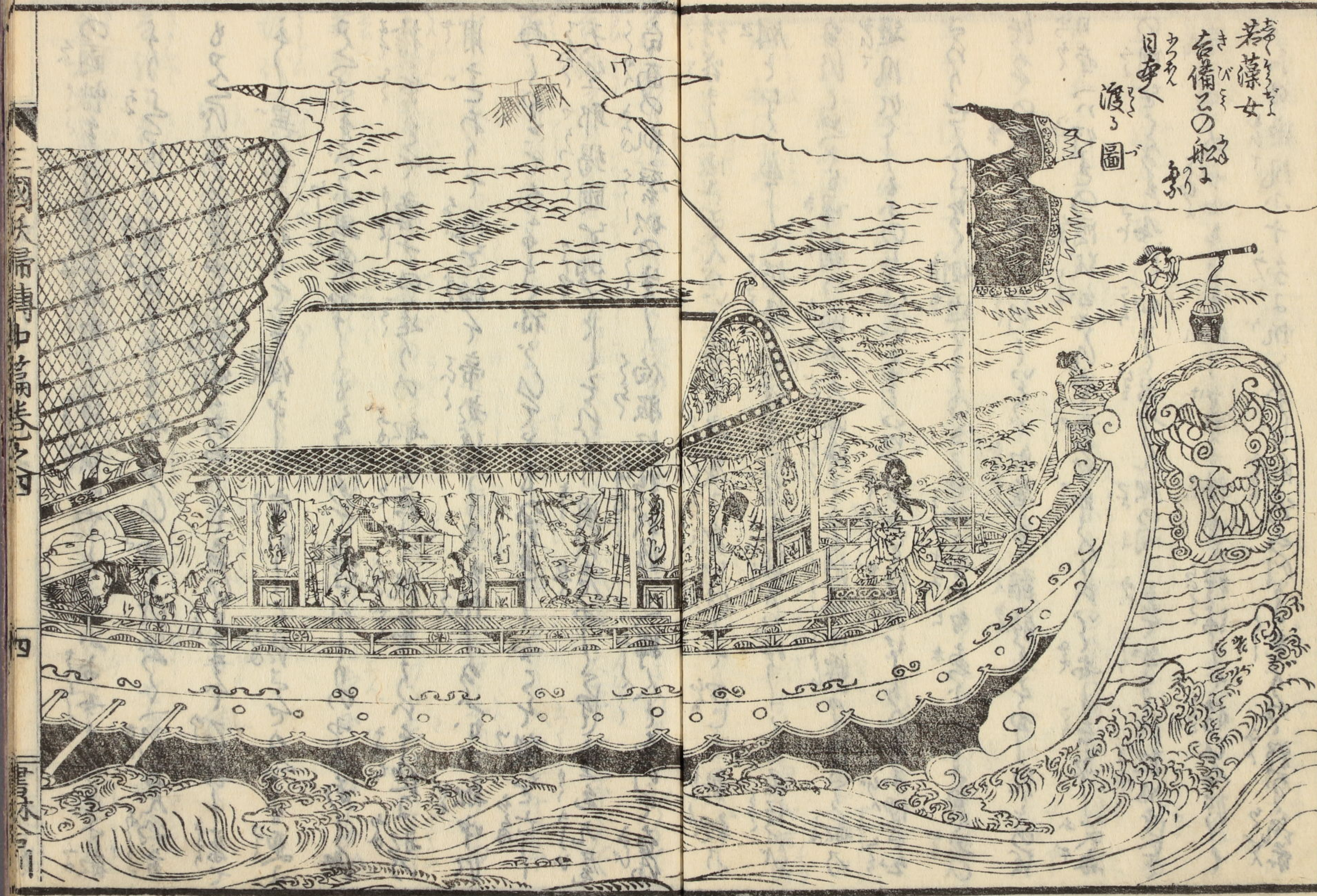
繪本三國女婦傳中編卷之四

吉備大臣歸朝英女孤謀て日本に渡り

初も吉備大臣の唐去少多と帝の孫美あつて英智をか
小解甲内の人皇に十代聖武天皇天平に申年多治比乃
廣成遣唐使として入唐一同七乙亥年三月帰朝せし此節
吉備大臣の先年入唐也玄昉僧正ももに帰朝於此にけり
少は唐の帝も名蹟をおきせし孫美治物名唐の敷をよ
吉備大臣の事と別あつて唐人一別をり唐乃凌又
歸帆の船せよとわいけり唐の帝より馳走して唐船借船
やう小水と稱る究竟ありてありしそあつてあつて

遣唐使
廣成吉備公
云助歸朝の
由服を
給ふ
圖





若藻女
まばら
を備との船
あ
目撃
渡
圖

三國物語中篇卷之四

三國物語中篇卷之四

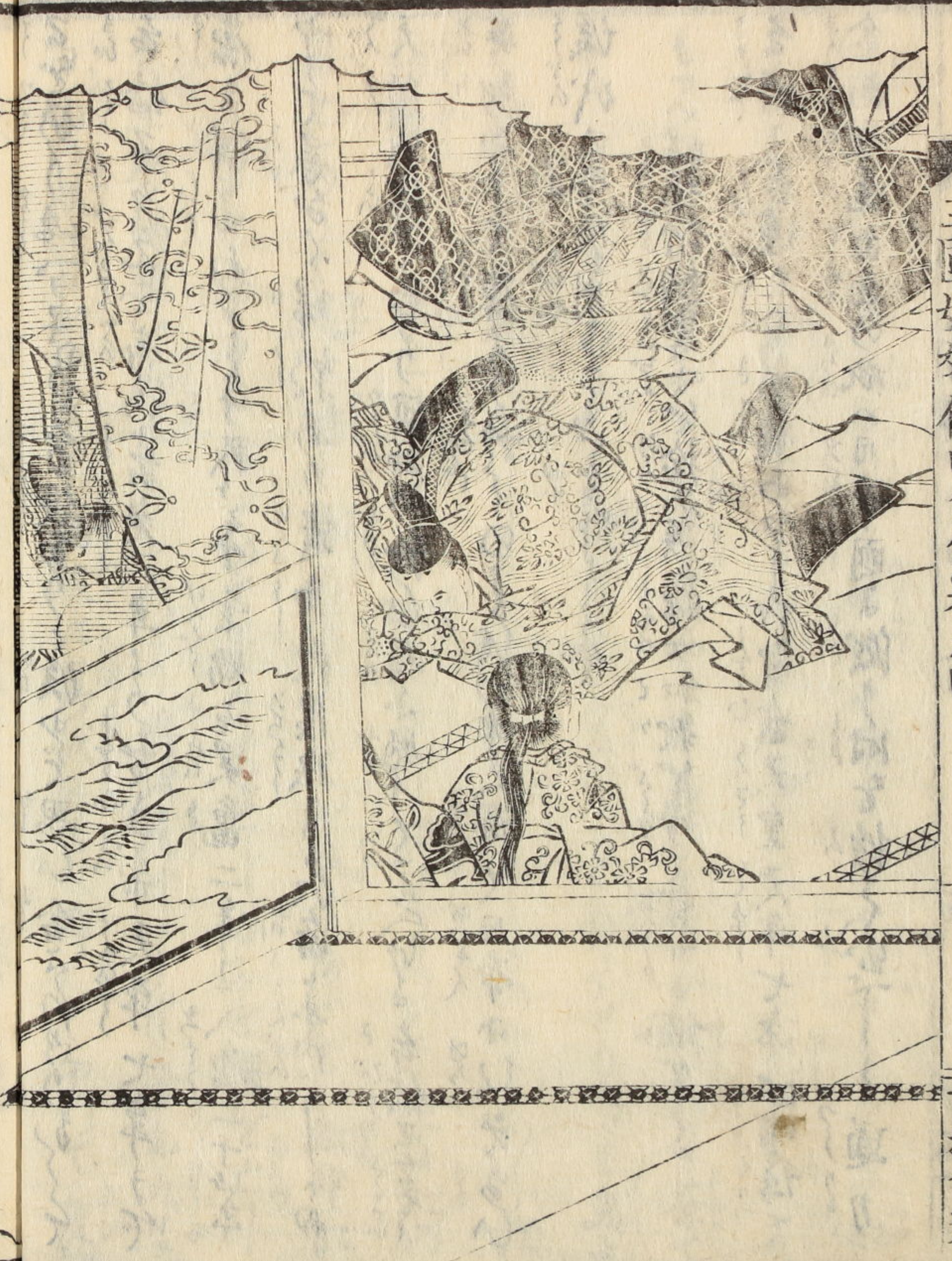
書林百寶

遣唐使
帰朝
参内
の
圖

三國女婦傳中巻卷之四

六

書林



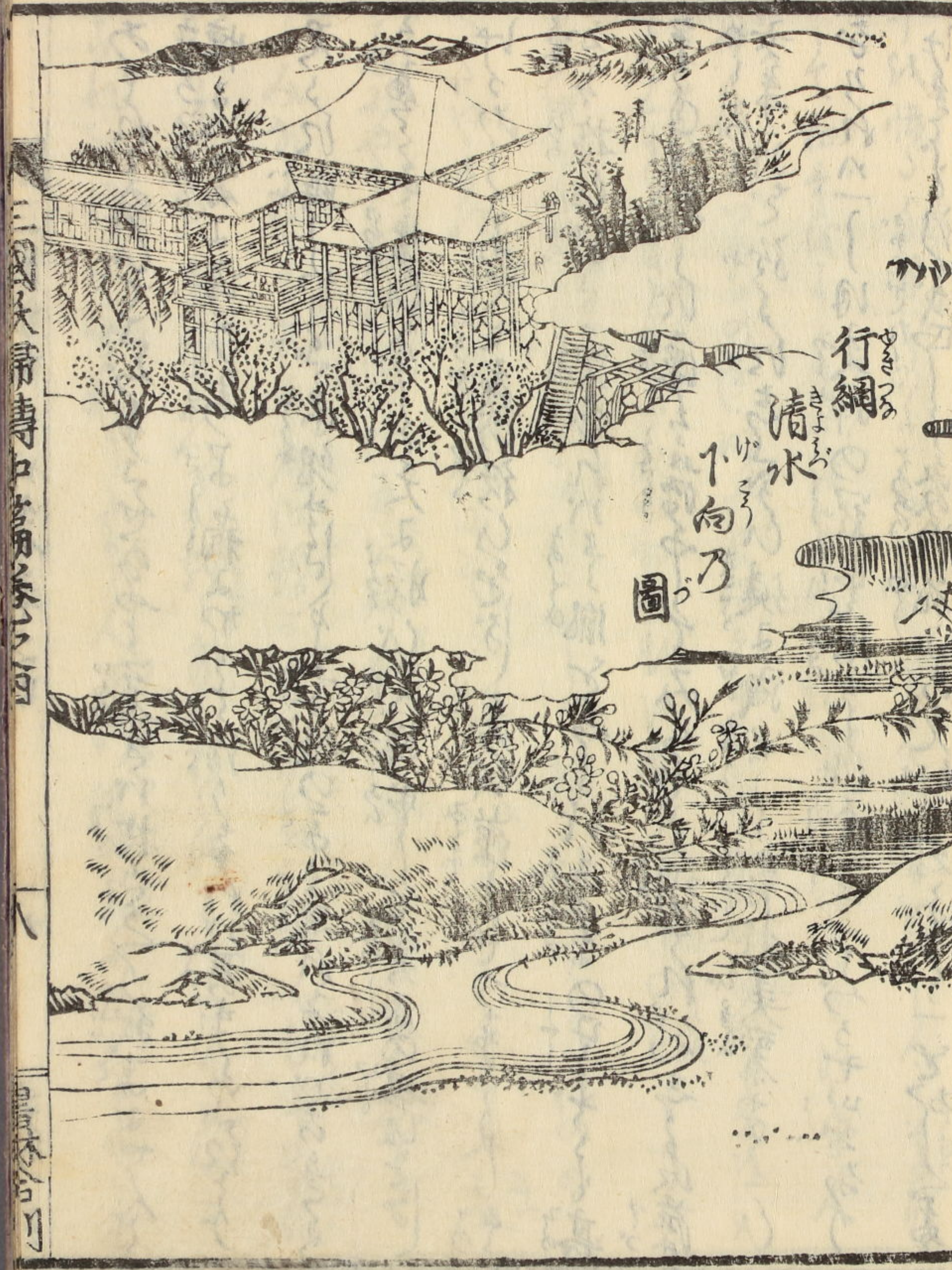
三國女婦傳中巻卷之四

六

書林

自在をとりて牙成志のびけりが附を掲ぐるもん二百七十の
 けりよ身を擧せし人五七十三代堀河院の法皇小南七先帝
 上皇御面の武士なり坂部庄司義人行綱とよそのありいさとの
 是美をそ勅勅を著り山城國山科のや中江に盤居し何を
 勅免わんと御別ひ法あるの銀音一擧ひ成りけり日毎に給ひか
 際しも兼由二戊寅年弥生の半に兼備し一向はかき春の南
 小さとのきて交つる候をそふ志しねむ中に見まかひ落る御
 候を煙に捲乃落知事との白きえ枝をまじく吹まら風も吹く
 わりぬ氣久あゝあゝと御御まけ吉羽の遊乃法く如意を
 是あり是は世塵をそあはし御小を御家の書言く下江原
 と南波のぞめは橋有山この中山法興寺今無事をも羽子でも
 山はささうらあつちまきこふ新藤まげりも樹を雲と法が
 雲のあも老東まき旭のまもさみしあはらうん獅子の雲を
 も山治村橋まきも池く雲門山紙法備かき御まはか
 りある教院は高峯の児乃啼あまけりく坂部は御
 ざふかりひまらうんあはてあまらうんやたごも思ひ見たり子
 後中一のあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはて
 捨し子にありけりあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはて
 金もあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはて
 小遊しあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはて

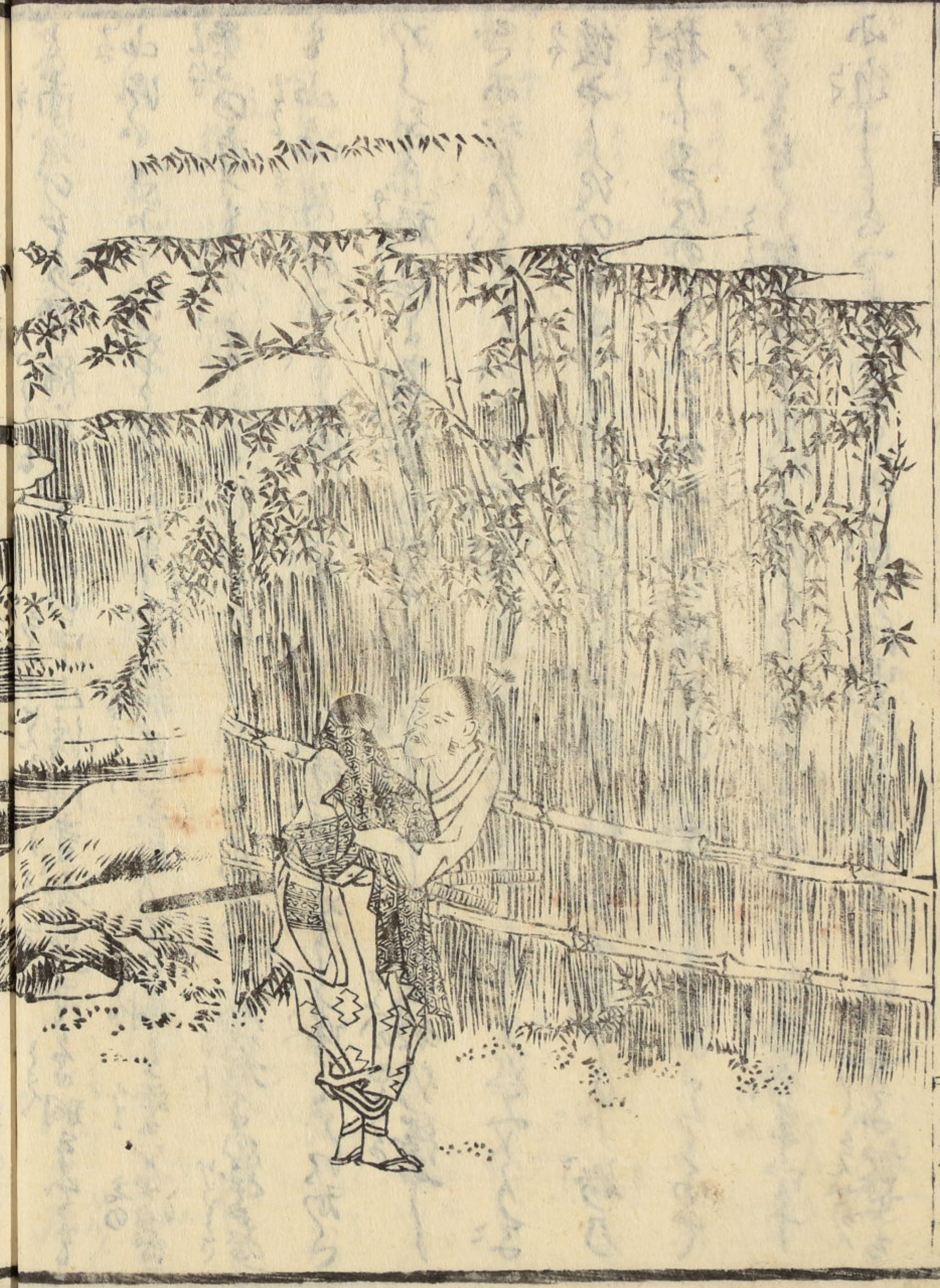
小遊しあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはて
 金もあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはて
 捨し子にありけりあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはて
 後中一のあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはてあまらうんあはて
 らある教院は高峯の児乃啼あまけりく坂部は御
 も山治村橋まきも池く雲門山紙法備かき御まはか
 雲のあも老東まき旭のまもさみしあはらうん獅子の雲を
 と南波のぞめは橋有山この中山法興寺今無事をも羽子でも
 山はささうらあつちまきこふ新藤まげりも樹を雲と法が
 わりぬ氣久あゝあゝと御御まけ吉羽の遊乃法く如意を
 候を煙に捲乃落知事との白きえ枝をまじく吹まら風も吹く
 小さとのきて交つる候をそふ志しねむ中に見まかひ落る御
 際しも兼由二戊寅年弥生の半に兼備し一向はかき春の南
 勅免わんと御別ひ法あるの銀音一擧ひ成りけり日毎に給ひか
 是美をそ勅勅を著り山城國山科のや中江に盤居し何を
 上皇御面の武士なり坂部庄司義人行綱とよそのありいさとの
 けりよ身を擧せし人五七十三代堀河院の法皇小南七先帝
 自在をとりて牙成志のびけりが附を掲ぐるもん二百七十の



行網
清水
下向乃
圖

三國妖婦傳中篇卷之四

書林合刊

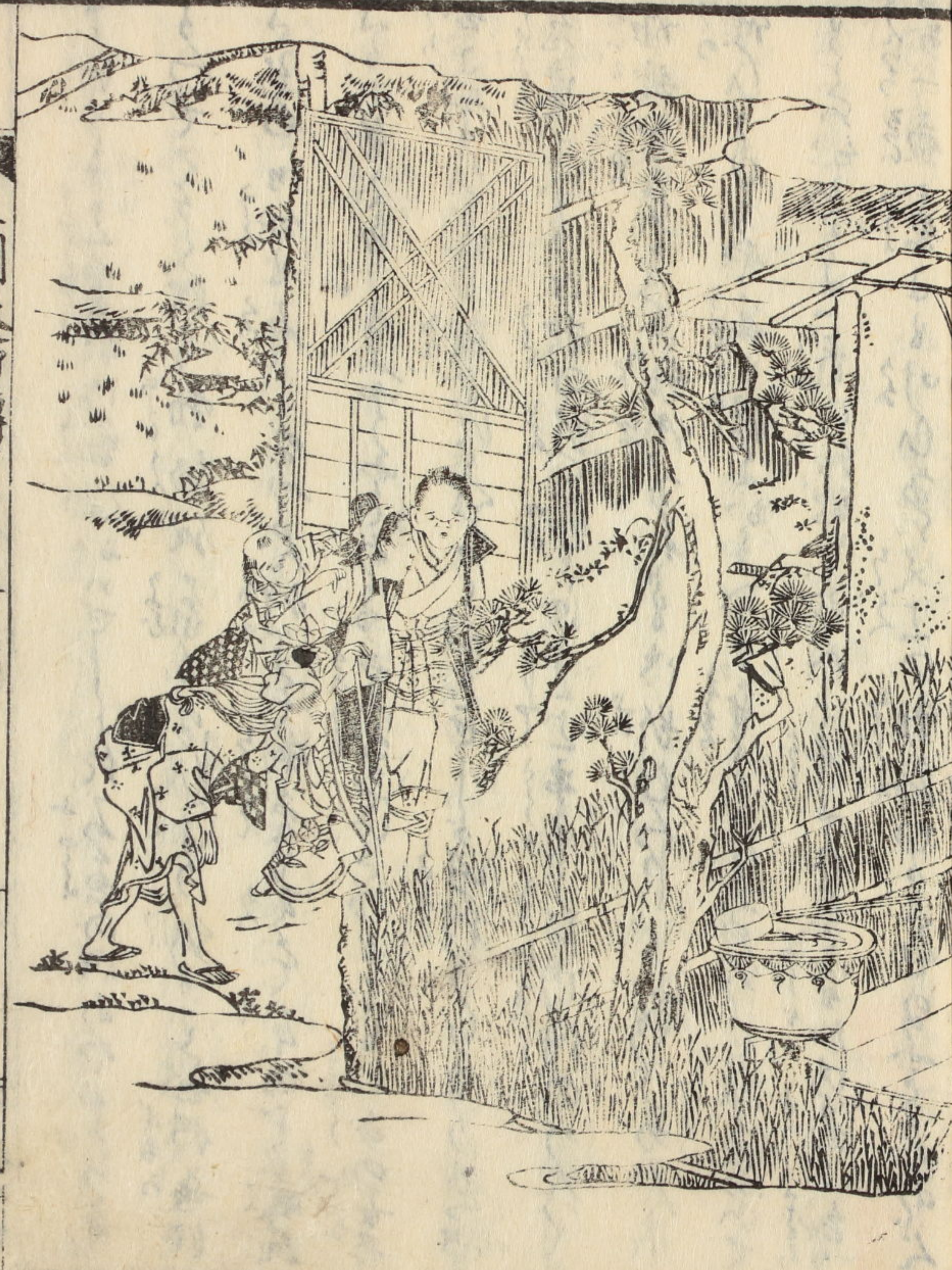
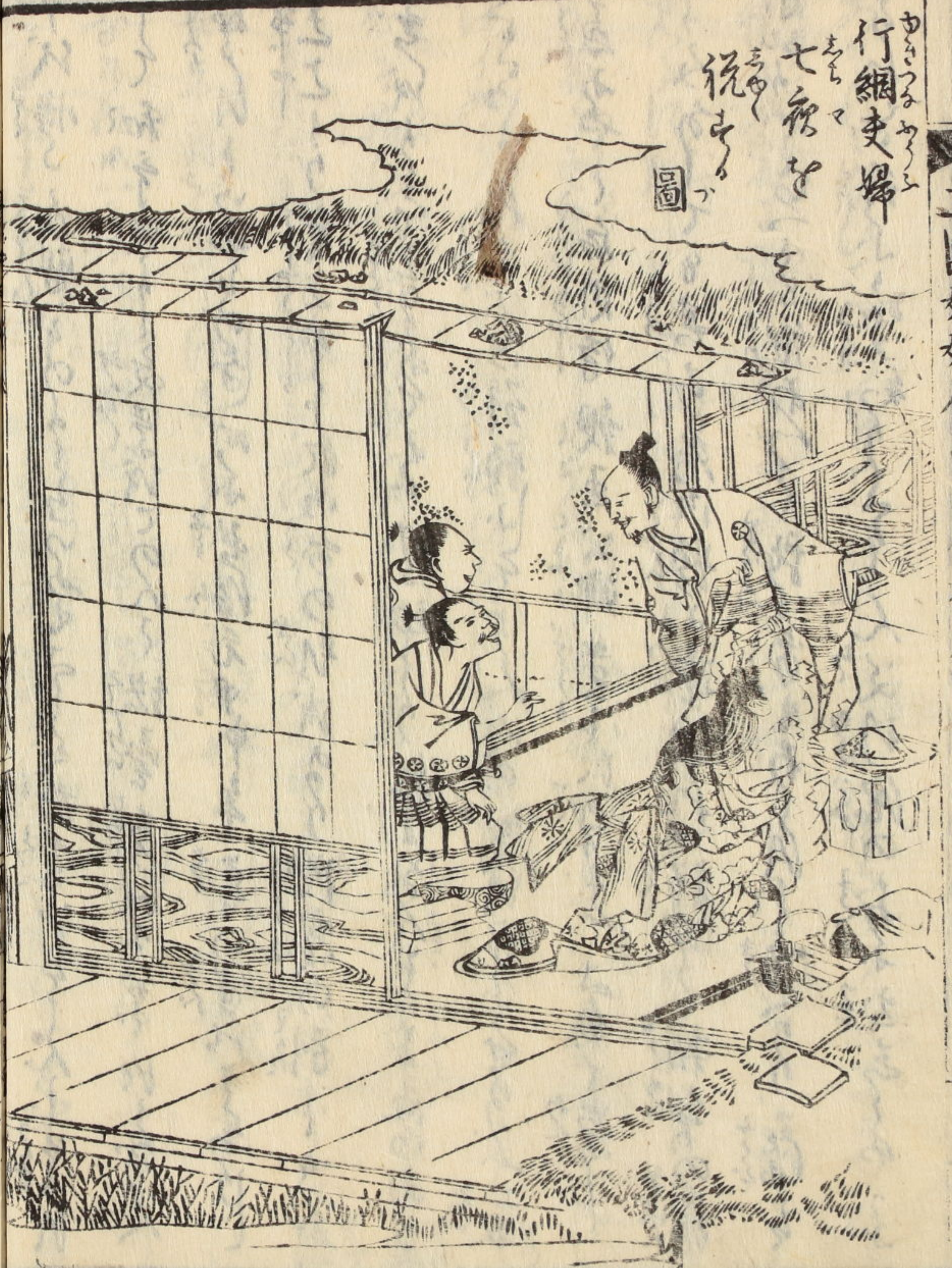


三國妖婦傳中篇卷之四

七

書林合刊

行綱交場
七宿を
祝する
圖



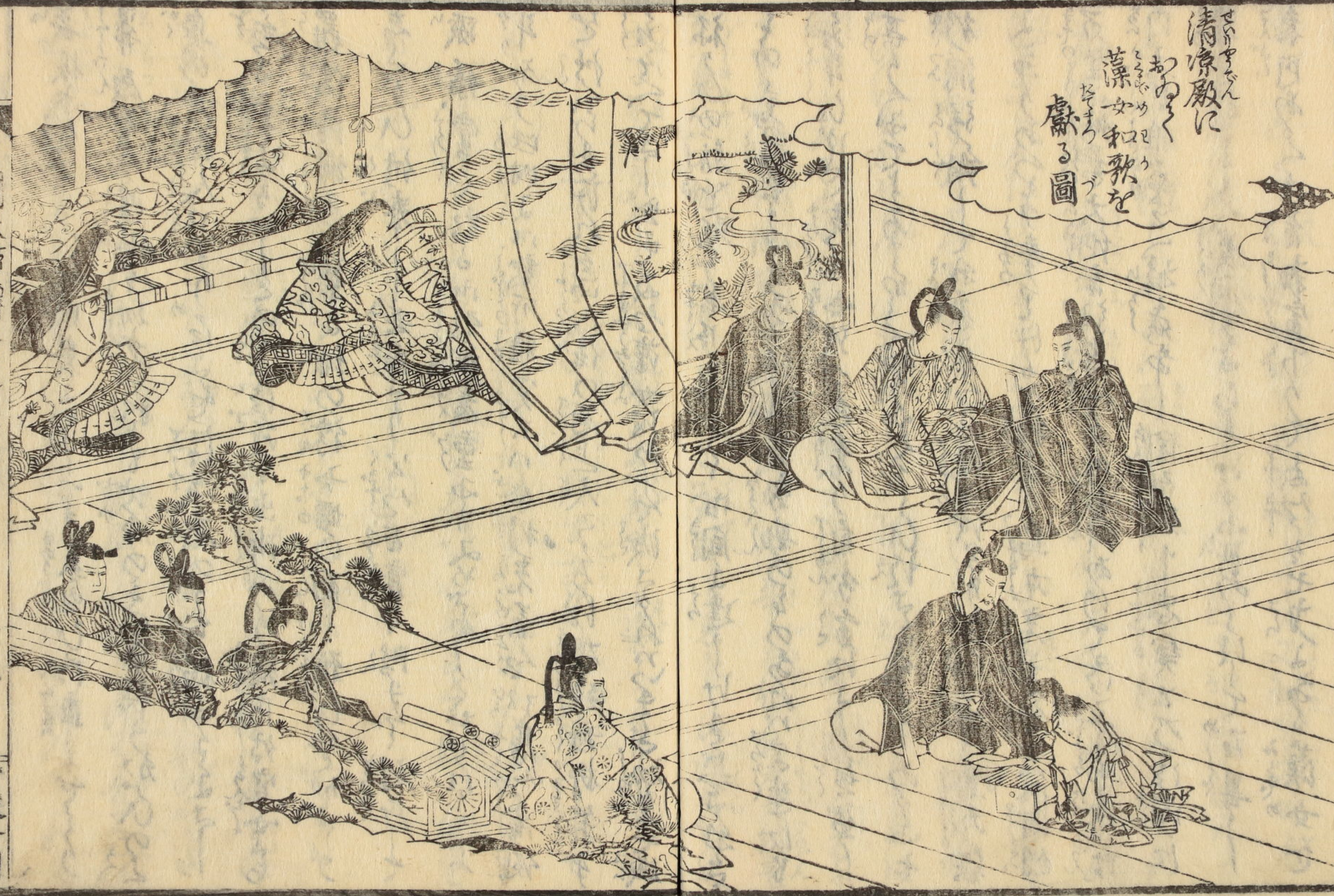
あしととも行をわね延と名をなす人又叙を奉時月
 せんを乃乃や血影影とるものり人又回を却るを福乃
 うきとつと血影とやあれ影影の中を遊々びうつてとら
 一首血影が処をよ秀とそ今がめまびあごる敵威を
 多ぶごんたんとさまごんてとむびる敵威よとむらる
 歌よあつびらつて血影ひりさ海ととあれがらう思ひ込
 いひけふを老くの少老といひ解つ初幸のころあきほ
 かくあやまりあつてもゆをせめんつあは娘がままお
 よすうせ又初徳日頃進令ありしは身まもり鳥丸大納言
 光兼々の被ふつりて長はよ對面まうくのひりとの
 福のの船と船りあはらうそく血聞は達しけまぶるひさ
 ものの持ちたるもあつて其方朝勤のものあればまもるに
 ん年いびに先く女奴つき来り自分方にくをせ
 其うくめてよわめんやふとつひにたさぶとあふを
 初調子知して我が家よりうは露女頭よりあひまの鳥丸家
 ふありあづも奉りしけら行あつ鳥丸光兼々よ血同的
 万聖は法系大納言弘房つと血お供ありては身まもり鳥丸院
 内大臣雅愛とつ枝を病中一園百願十忠愛公乃清園に
 達されらうと羨同とあらまけらお日あつて百具
 糸月あつて首勅宣下りてあつて七才よある藻女を

三國女御傳中卷

十一

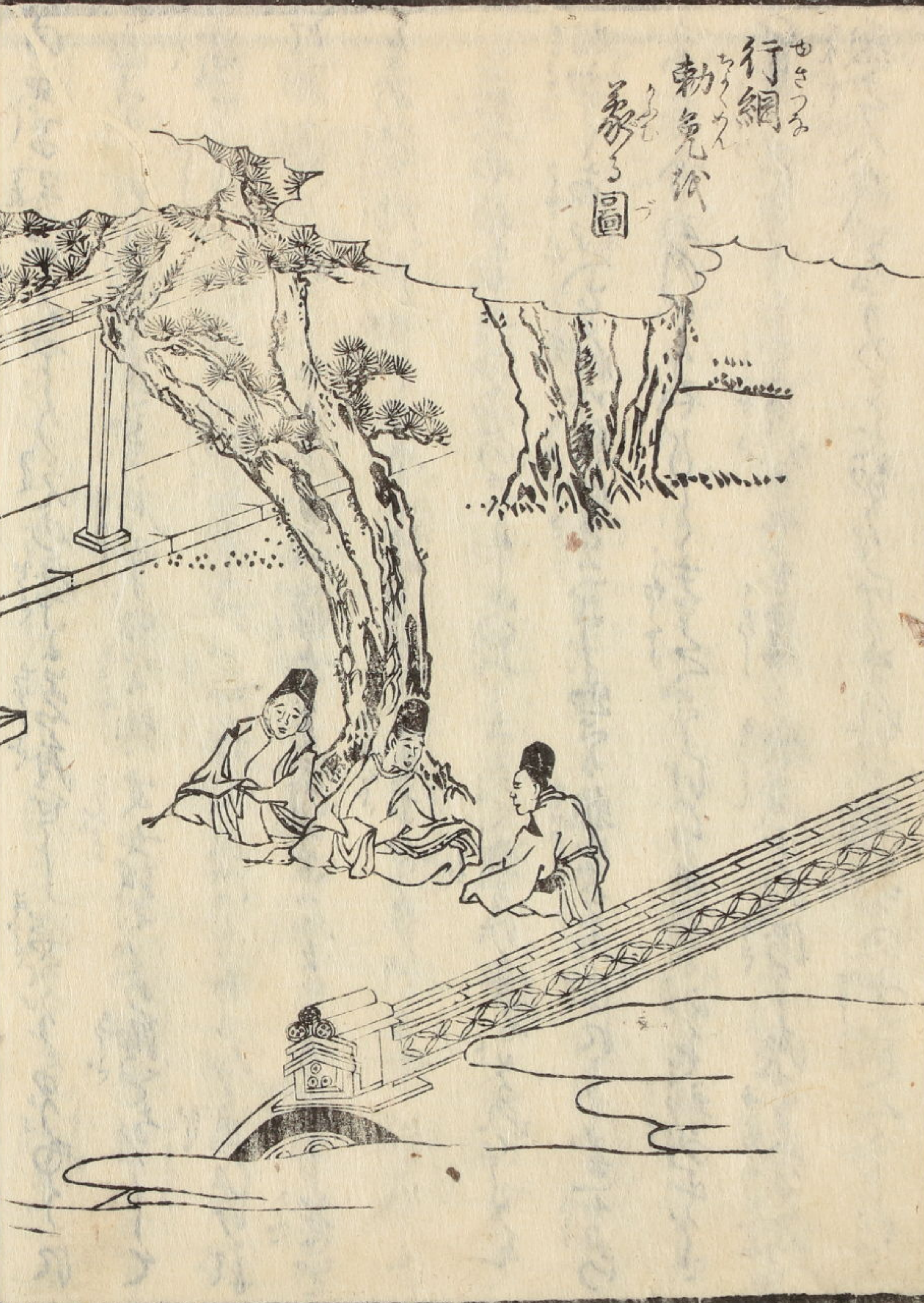
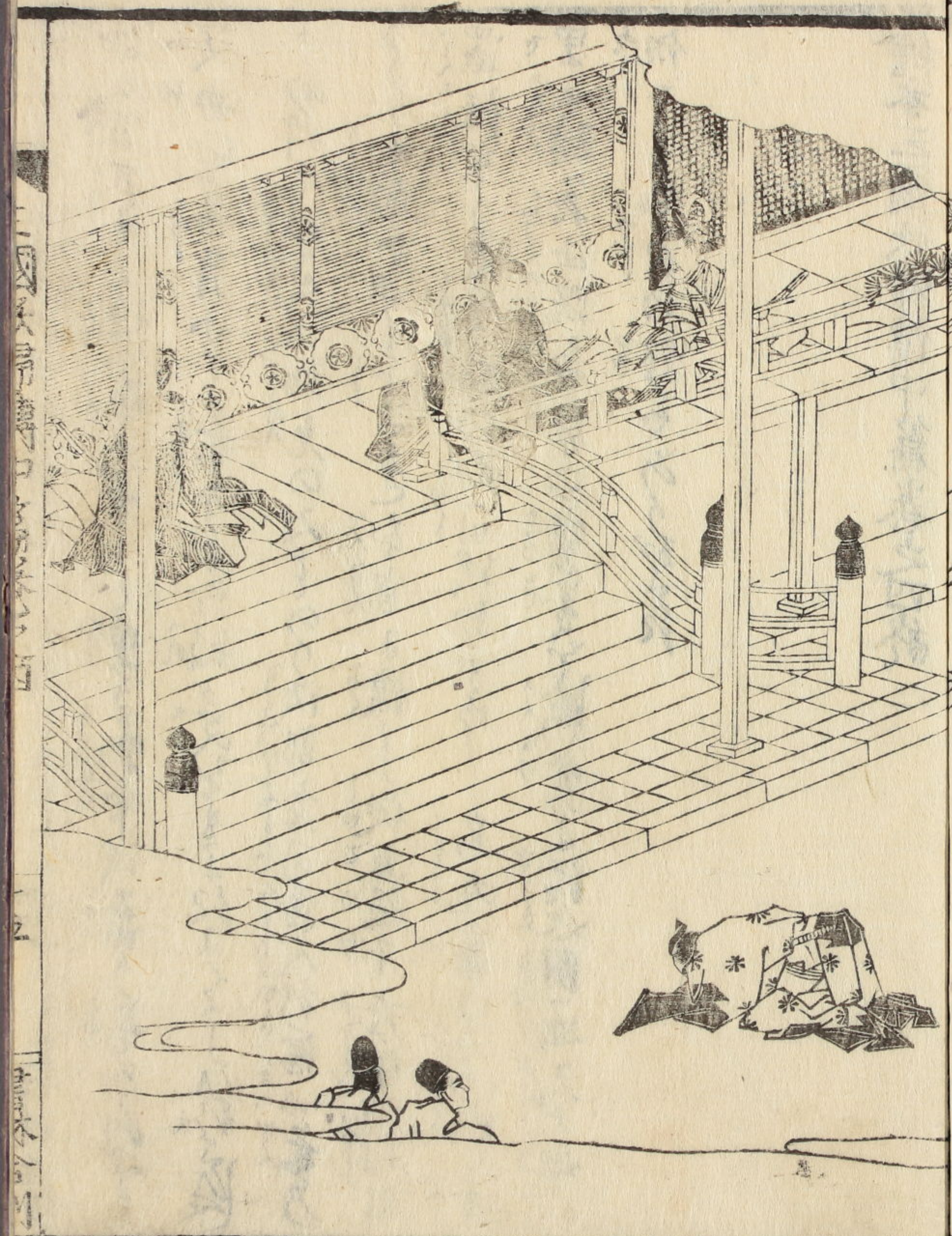
三國女御傳中卷

清涼殿に
おのろく
藻女和歌を
獻る圖



若狭ホノヲノミセ内裏よめ一ツ建系みひ清車ニセヨリ
 昇殿あり藤女ヲ初少レねども地中ノそのあらがらかひのこ
 奥の女翁人口よりほろせ清涼殿のうち極ざりて
 あり王よりかこのるは清涼殿より出所あり后内侍官女
 羅儀清涼殿より藝又織の袴女傭の面々雅ひをかざり
 志こがひ竹奉一逆居り公の百官を階下が別府に
 儀儀常くたる此形相若重中も又めどあしくかたれうらみ
 斗あり此阿又此歌所雅実公ハ奉り元兼の公房の公阿
 を侍らまけれは公六位の殿上人らうらり現經冊柳葉牙
 らりて一上はあや藤女はめして後さるればまご初年七歳

の女子是ぞとあしりえの席よまの殿せし婆とありありに
 侍り目之をまご殿中の公御女城への源どあがりて
 感もつれにれが初相のもの侍らあれはいうあんと思ひけり
 ひと思つるめらうあまは藤女まきけらふまごを流しをさ
 との總冊とあしりてなすりと書トセり
 若狭の公も初相のその火のつとえて我らけまごをさしりえ
 おかよあしりてれバ雅察とて一此の雅察を此の公にさしり
 うふ海分ありてあしりまごまご一げらまごのゆを秋のまご
 の秀也あまのまごまごも舞々感感とて清涼殿の公を
 感とて人感あまのまごあしりけるまごの女もさしり



世に
行網
勅免
図

三層好婦傳中篇卷之四

十四

書板合刻

ざる百其まう仕へ奉る御うと重き勅命坂家より是より
 父母の書着ふより御書をば被うと云ふもよれと云ふは
 とありて四つは御勅免のみとの取部を司善人初孫の
 下り小面よめト云ふは官は復し從五位下大膳門下
 還任せし是生前の面目改むとあり烏丸家の名は
 里小路花山院お家の御書は感實は清水圓通大寺
 能くお書の内容の程をあらわす

繪本三國妖婦傳中篇卷之四終

